

# 博士学位論文審査要旨

2012年1月13日

論文題目： 近世「長恨歌図」の研究—『長恨歌抄』の世俗化を手がかりに—

学位申請者： 村木桂子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 太田孝彦

副査： 文学研究科 教授 岸 文和

副査： 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 教授 並木誠士

要 旨：

本論の目的は、白居易の詩「長恨歌」を主題とする絵画（「長恨歌図」）が、近世において、その注釈書や奈良絵と交流することによって、庶民性を持つものへ変容したことを、《長恨歌図屏風》（個人蔵 国華本）において明らかにすることである。

序章では、先行研究を整理し、日本文学での成果を取り入れて近世「長恨歌図」を研究する必要性を提示する。第一章では、古代・中世の貴族たちが、「長恨歌絵」を、玄宗を主題とする文学性や勸戒性において受容していたことを指摘する。第二章では、近世初期の奈良絵「長恨歌図」の出典となった注釈書「長恨歌抄」を取り上げ、物語内容が世俗化するとともに、その主題が玄宗から楊貴妃へとうつり、庶民化していく様相を明らかにする。第三章では、奈良絵「長恨歌図」を分析し、これらが「長恨歌抄」以外にも、近世の通俗的メディアである版本の図様を取り入れ、ますます通俗的で親近感のあるものへと変容したことを明らかにする。第四章では、《明皇・楊貴妃図屏風》（フリア本）などの大画面「長恨歌図」が、「長恨歌」の詩句だけを出典としていることを確認する。第五章では、《長恨歌図屏風》（国華本）が「長恨歌」の詩句だけによって描かれたフリア本とは異なり、奈良絵や版本などの近世的メディアとの交通によって制作されたことを明らかにすることによって、フリア本などの大画面「長恨歌図」が近世の為政者のための室内荘厳装置として使用されていたのに対して、町人の婚礼道具として使用された可能性を提示する。終章では、こうした世俗化、庶民化の動向は、この《長恨歌図屏風》（国華本）だけではなく、ほかの絵画作例にもみられることを指摘し、この時代の一般的な潮流であったことを確認する。

本論文の特色は、日本文学研究の成果を取り入れた観点から近世「長恨歌図」を考察することによって、従来見落とされていた庶民の世界での近世「長恨歌図」の制作と受容の様相を明らかにしたことである。先行研究を十分に検証し、また画面を注意深く観察・考察した研究であり、その記述は説得力に富んでいる。本論文の骨子となる論文は学会誌に掲載され、すでに高い評価を得ている。よって、本論文は博士（芸術学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2012年1月13日

論文題目： 近世「長恨歌図」の研究—『長恨歌抄』の世俗化を手がかりに—

学位申請者： 村木桂子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 太田孝彦

副査： 文学研究科 教授 岸 文和

副査： 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 教授 並木誠士

要 旨：

上記の審査委員3名は、2012年1月13日15時から2時間にわたって、学位申請者に対して口頭試問を行った。申請者は、提出論文への質疑に対して、的確かつ詳細な応答を行うことによって、本論文の学術的価値を実証するとともに、芸術学・日本美術史に関しても広く深い学識を有することを示した。また、外国語（中国語・英語）についても、十分な学力を有することが確認された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目： 近世「長恨歌図」の研究—『長恨歌抄』の世俗化を手がかりに—  
氏名： 村木 桂子

### 要 旨：

唐の玄宗皇帝（685～762）と楊貴妃（719～756）を題材とする絵画は、古代から近世にわたり出典を広げ、形式を増大し、様式を変化させ、用途を追加しながら連綿と描き継がれてきた。それらは大きく次の二つに分類することができる。一つは白居易の詩「長恨歌」を主題とする「長恨歌図」と、もう一つは『開元天寶遺事』（五代・王仁裕撰）などに基づいて玄宗皇帝の故事を描く「玄宗故事図」である。この「長恨歌図」と「玄宗故事図」をあわせて、管見するところでは屏風・襖絵 30 点、掛幅 40 点、扇面 15 点、絵巻 3 点、奈良絵本 5 点、奈良絵巻 10 点、浮世絵 2 点の都合 105 点を数えることができる。本論の目的は、これらの絵画のうち近世に描かれた白居易の詩「長恨歌」を主題とする「長恨歌図」21 点を取り上げ、その世俗化の様相を解明することである。

これまでの研究は、日本美術史の立場から論じたものと、日本文学の立場から論じたものに二分される。日本美術史の分野で注目されるのは、玄宗と楊貴妃を題材とする絵画の古代から近世の作例を分類し、体系的に論じた武田恒夫の「玄宗皇帝絵」（『国華』第 1049 号）である。そのなかで武田は、「長恨歌」を主題とする長恨歌系、安祿山の侵攻とそれに伴う玄宗と楊貴妃の出国を描いた勸戒画系、そして、『開元天寶遺事』などに基づく宮廷風俗図と唐美人図をあわせて唐風俗画系の三系統に分類し、近世に玄宗と楊貴妃を題材とする絵画が出典を広げ、様々な性格をもつ絵画へと変容していく様相を明らかにしている。また、大画面障壁画の作品研究では、鈴木廣之がフリア美術館所蔵の《明皇・楊貴妃図屏風》と個人蔵の《長恨歌図屏風》（『国華』第 1052 号）のそれぞれの特徴と差異を指摘した論考は見逃すことはできない。しかし、これらの論文では両者の絵師および制作環境の差異が示唆されてはいるものの、それらの性格や用途、受容者について深く言及されることはなかった。このほか絵巻の研究では、脇坂淳や榊原悟は、狩野山雪（1590～1651）筆《長恨歌画卷》（チェスター・ビーティー・ライブラリ蔵）が故事の誤謬を正し、「長恨歌」の詩句を忠実に絵画化するために制作した絵巻であることを、『長恨歌図抄』（1677）の序文を引用することによって明らかにしている。しかしながら、この絵巻と大画面「長恨歌図」との関係について論じることはなかった。まして、この他の絵巻や奈良絵の「長恨歌図」と大画面「長恨歌図」との関係について論じられることはなかった。

一方、日本文学研究の分野では、小林健二は奈良絵の《長恨歌絵巻》（大阪大谷大学蔵）は「長恨歌」の絵入り注釈書である『やうきひ物語』（1658～72 頃）を基に制作された絵巻であることを明らかにした。これは、整版本の存在が奈良絵制作に深く関与することを論じた注目すべき論文である。しかし、『長恨歌図屏風』（国華本）のように奈良絵の「長恨歌図」や絵入り版本からの影響があると考えられる作品が存在するにも関わらず、これまで近世の大画面「長恨歌図」と奈良絵の「長恨歌図」との関係を問う試みはなかった。

そこで本論は、上記の先行研究を踏まえながら、近世に描かれた「長恨歌」を主題とする大画面作品を取り上げ、日本文学研究が培ってきた成果を取り入れて、長恨歌抄とそれに基づいて制作された奈良絵などの近世のメディアが有するテキストとイメージを大画面「長恨歌図」に関係づけることによって、大画面「長恨歌図」の制作と受容の様相を明らかにしようとするものである。したがって、本論の具体的な課題は、大画面「長恨歌図」はどのような場面を選択しているのか、玄宗と楊貴妃はどのような図様形態と配置で描かれているのか、またそのような図様の源泉は何に求められるのかを、「長恨歌」の注釈書や奈良絵、あるいは同時代に刊行された版本のテキストとイメージを分析することによって明らかにし、近世の大画面「長恨歌図」がどのような場で、どんな受容者によって、

何のために利用されたのかを明らかにすることにある。

本論での具体的な手続きは以下のとおりである。序章では先行研究の批判的検討を行ったうえで課題と方法を示した。第一章では「古代から中世の〈長恨歌絵〉」と題し、近世以前の長恨歌絵を分析し、その制作状況と受容の様相を明らかにするため、宇多天皇（867～931）の命で制作された「亭子院の長恨歌屏風」を取り上げ、この屏風に付された和歌を分析することによって、上級貴族が文学的情趣を享受するために受容したものであったことを明らかにする。またそればかりではなく、藤原道憲（～1159）が後白河法皇（1127～92）に進覧した「玄宗皇帝絵巻」は、『旧唐書』などの歴史書の記述を参照し、玄宗の失政の場面を描写することによって、為政者に対して勸戒を促す手段として用いられたものであったことを確認する。

第二章では、「近世〈長恨歌図〉の新たな典拠」と題し、奈良絵など近世の「長恨歌図」の典拠となった長恨歌抄の絵入り版本をテキストとイメージの両面から分析することによって、その世俗化の様相を明らかにする。第一節では、長恨歌抄が、漢字片仮名の写本から平仮名交じり文に挿絵を付す整版本へ移行することを確認し、注釈書の性格が庶民的な読み物へと変容したこと、また、整版本に楊貴妃の存在を強調する文言を加えることによって、玄宗から楊貴妃を主体とする内容へと変化していることを指摘する。第二節では、注釈書の挿絵の分析を行い、楊貴妃の親族に関する注釈書独自の逸話を絵画化していること、玄宗と楊貴妃の別離を詳細に絵画化していることを確認し、このような図様からは楊貴妃の半生を軸として場面を選択し、世俗的関心に応えようとしていることを指摘する。

第三章では、「奈良絵の〈長恨歌図〉にみる特質」と題し、『やうきひ物語』を粉本に用いた「長恨歌図」と、それとは別系統のライデン国立民族学博物館所蔵の奈良絵本《長恨歌》のテキストを用いた「長恨歌図」を取り上げて場面を分析することによって、両者には楊貴妃に寄せる通俗的な関心に共通性があることを指摘する。第一節では奈良絵に用いられる二系統のテキストはその内容に差異はあるが、絵画化に際して両者はともに「長恨歌」の詩句の順に従って場面が展開すること、とはいえ、これらの場面には奈良絵に顕著な注釈書独自の場面を含んでいることを指摘する。第二節ではその理由や意味を明らかにするため、大画面「長恨歌図」では絵画化されなかった奈良絵に特徴的な三場面—安祿山の沐浴、華清池の温泉、楊貴妃の死—の図様について分析する。その結果、玄宗は楊貴妃を溺愛する好色な人物として、楊貴妃は一族の栄光と悲劇を象徴する人物として捉えられていることを指摘し、奈良絵が楊貴妃に寄せる通俗的関心を語るものであったことを確認する。第三節では、仮名草子『是楽物語』（明暦頃）、浄瑠璃正本『楊貴妃物語』（寛文3年刊）などに登場する玄宗・楊貴妃が、第二節で確認した奈良絵の玄宗と楊貴妃のイメージと同じく、従来の高貴な人物像を喪失し、人間味のある人物像を獲得して、そのイメージを一変していることを指摘する。

第四章では、「大画面〈長恨歌図〉にみる典拠としての詩〈長恨歌〉」と題し、大画面「長恨歌図」の《明皇・楊貴妃図屏風》（フリア本）、《長恨歌図屏風》（東博本）を取り上げ、それらが「長恨歌」の詩句を典拠として場面が構成されているのに対して、《長恨歌図屏風》（国華本）は「長恨歌」の詩句のみでは、完全に解釈できないことを改めて確認する。

第五章では、「《長恨歌図屏風》（国華本）にみる世俗化」と題し、国華本がフリア本とは全く異なる制作環境、受容者、性格があることを解明し、新たな受容を目指して制作された「長恨歌図」の出現を提示する。第一節では、第四章の場面解釈を踏まえて、国華本の場面が『やうきひ物語』のテキストに基づいて構成されていることを指摘する。そればかりか第二節では、国華本に描かれた場面のうち、「長恨歌」に基づくものの図様が、奈良絵や仮名草子などの図様の影響を受けていることを明らかにする。さらに第三節では、国華本に新たに挿入されたモチーフの中には、女性の人生を言祝ぐとみなしうる吉祥図様があることを指摘する。第四節では、フリア本と国華本の様式的特徴を比較することによって、フリア本が格式の高い接客空間で為政者の権威を高めるための装置として利用されてきたことに対して、国華本は、世俗的空間で富裕な町人のための婚礼調度として利用された可能性を提示し、「長恨歌図」の世俗化を主張する。

以上の議論を踏まえて終章では、近世の「長恨歌図」にみる世俗化への傾斜は、「長恨歌図」に特有の

現象ではなく、それ以外の「玄宗故事図」においても同様の傾向があることを明らかにする。というのも、楊貴妃の単身像を描いた狩野常信（1636～1713）筆《楊貴妃図》（静嘉堂文庫美術館蔵）は、楊貴妃が玄宗と対になって画題を形成するのではなく、楊貴妃単独で美人図の画題となったことを示しており、これは「長恨歌図」の楊貴妃が風俗画的、世俗的関心を満たす存在となったことと合致する動向であることを指摘する。さらに、後に四条円山派は楊貴妃の単身像を盛んに描いたが、これは玄宗と楊貴妃が武家のみならず、町人嗜好の主題へと拡大していったことが確認できる。このような世俗化の傾向は、十八世紀の文学や絵画全般で語られる雅から俗への転換という動向の魁となるものであり、十七世紀に一世を風靡した近世「長恨歌図」にも同様に雅から俗への傾斜を見ることができる。つまり、世俗化して新たな用途と受容者を獲得することによって、従来にない町人のための「長恨歌図」を生み出したことを指摘するのである。